

## 教師の力量形成と研修：実践の歩みを振り返る

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 巨田, 尚彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/5601">http://hdl.handle.net/10098/5601</a>

## 教師の力量形成と研修 －実践の歩みを振り返る－

巨田 尚彦

### はじめに

教育改革や学力向上の問題をはじめ学校教育の改善が目され、声高かに要請されて久しい。それは、学校の教育が決して悪くなっているからではない。むしろ、年々高く評価されるほど立派な学校運営が行われているが、学校の教育力が子どもの成長発達をめぐる社会的環境の変化への対応に苦慮しているためであろう。学校教育の質を決定するのは、言うまでもなく教師の力量に負うことには論を俟たない。教師には、常に専門職としての資質と力量の向上を目指した主体的な努力が強く期待されている。教師の力量形成のために、研修の在り方もさまざまな大学や教育関係機関等で研究され実践されている。教師が専門職として成長するには、その教師の発達課題に十分こたえうる研修が必要である。しかし教師の場合には、人間の成長発達の過程とは異なり、その就任後できるだけ短い期間に最新の知識や実践的情報などを資源として専門職にふさわしい成長をし、絶えず力量を高める取り組みが要求されている。さらに、中堅教師や、学校の指導的立場にある教師には、指導者の役割と資質について研修を深め、学校運営に主体的に参加することを通して、将来管理職としての指導者にふさわしい力量を形成することが期待されている。いずれにしても、学校においては、その学校の教職員が積極的に研修を行い、各々のキャリアや役割にふさわしく資質や力量を形成し向上させることによって、学校全体の教育力を高めていかななくてはならない。学校というコミュニティにおいて、研修への雰囲気や醸成させることと、その研修体制を活性化することが、今日の教育課題にこたえる何よりの力になるものであろう。

ところで、2007年(平成19年)、福井大学教職大学院設置準備委員の中に3名の実務家教員がスタッフとして配属されたことは、学校サイドから見て大変画期的な人事であった。福井大学の英断があつたことだが、今までの大学と学校の関係では到底考えられないことで、時代が変わってきたという驚きとともに大学の本気を感じ取ることができた。大学と学校との協働を成功させていくには、お互いの歩み寄りや相互理解が必要である。これまで大学側は熱心な先生方を中心に、長年にわたり大学の附属校および特定の学校との連携や様々なプログラムを通して協働研究を深めてきたが、他の殆どの学校との距離は遠いものであった。この3名のメンバーが大学に入ることによって、この距離は格段に近くなったと考えられる。実務家教員と大学研究者の融合による連携した取り組みは、教職大学院の院生、拠点校、連携校、さらには一般の学校へと波及していくことは確実である。目まぐるしく変化する今の時代、専門職としての教師の力量形成という大きな課題に学校だけの力で取り組むには限界がある。福井大学教職大学院の挑戦は、学校さらには各教育関係機関などとのコラボレーションを拡大することにより、専門職としての教師全体の実践的・力量形成に大きく寄与していくものである。

今年度私は福井大学教職大学院のスタッフの一員(客員)として、スタッフ会議、FD(Faculty Development)研究

会、合同カンファレンス、集中講座などに参加する機会に恵まれた。本教職大学院の目指す、理論・実践の理念と教師の力量形成のダイナミズムについて考察し、自分の役割は何かを少し明確にしていきたい。特に、教職大学院におけるさまざまな小グループでの話し合いを中心にした活動は、私のこれまでの実践の歩みを振り返る契機を与えてくれたので、ささやかではあるがこのことをこれからの教育を考えるヒントにしたいと思っている。

本稿では、第1部で、先ず福井大学教職大学院設立に至る経緯と理念を理解し、本年度参加した活動の概要を振り返る。第2部で、自分自身の拙い実践の概略および長期研修の体験を振り返り、これらが私にとって教師としての力量形成につながるものであったのだろうかということを検証するきっかけとしたい。時代背景は大きく異なるが、自分自身のこれまでのいくつかの取り組みを通して、教師の力量形成へのアプローチとは何だったのだろうかということであらためて省察することは無意味ではないであろう。

## 第1部 福井大学教職大学院

### 1 福井大学教職大学院設立に至る経緯

先ず福井大学教職大学院が、何を目的にどのような経緯で設立されてきたかを理解することは重要であるので、4月以来見聞きしたことから主なものをまとめてみる。

福井大学方式の特色ある教職大学院は、ほぼ20年間の長きにわたり、関係大学教員の方々の高い理想のもとに対話と実践を重ね、前身である大学院「福井大学学校改革実践研究コース」での取り組みを経て、さらに目的意識や戦略・方法を練り上げるといふ大変な努力の結果誕生したことが伺える。1990年(平成2年)から長野県伊那小学校の総合学習の実践記録を学部学生と読み合わせる活動をはじめ、訪問にも何度も出かけ「子どもがつくる授業」に総合学習の手応えを得、福井大学附属小学校の低学年の総合学習で発展させ、さらに附属中学校においても展開した。1992年(平成4年)には「学校改革」を大きなテーマとして、教育系大学院(修士課程)が学校教育専攻、障害児教育専攻、教科教育専攻の3専攻で発足した。この時院生は、1年目は大学で、2年目は学校で取り組む形を取ったが、活動は大学中心の傾向が強かった。一方では、学生の活動を中心にした新しい事業をスタートさせた。1994年(平成6年)に、不登校児童生徒に対して学部学生が対応する「ライフパートナー」活動を開始し、今日まで継続・発展している。この活動は、私が福井県教育研究所で不登校の児童・生徒にかかわる事業に携わっていた時期に、連携させていただいた経緯がある。その翌年には「探求ネットワーク」を開始し、この事業も今日まで継続・発展してきている。この二つの事業における学生中心の活動は、新しい学校づくりを目指す際の大きなヒントになったのではないかと推察できる。

さらに、学校と大学教員との協働研究スタイルの基盤として、附属中学校との協働研究「探求・創造・表現する総合的な学習—学びをネットワークする」を1999年(平成11年)に刊行した。2001年(平成13年)には、学校拠点の協働研究方式をとる「夜間・学校改革実践研究コース」の試行を開始し、大学教員が現職教員(大学院生)の勤務する学校へ出向いて研究会などを実行した。1年目は福井大学附属小学校で実施し、院生の取り組みは格段に向上し、大学教員も学校に対する理解を深めていった。このような取り組みを通して、「学校拠点の協働研究方式」は教育実践の中心に位置づけられた。2004年(平成16年)に附属中学校との協働研究をさらに深め、「中学校を創る：探求するコミュニティへ」を刊行し、「探求型授業」と「大学との協働研究」を柱に教職大学院の「学校拠点の協働研究方式」という基本デザインを提示した。そしてこの理念のもとに1年の準備期間を経て、2008年(平成20年)に教職大学院が正式にスタートした。

教職大学院は、「スクールリーダー養成コース」（福井県教育委員会との連携による中核現職教員対象）と「教職専門性開発コース」（拠点校へのインターンシップによるストレートマスター養成）の二つのコースから成り、本年度はその3年目を迎えている。教職大学院の定員は初年度の10名から30名に拡大し、スタッフも大学研究教員・実務家教員（教授、准教授、機関研究員、非常勤講師、客員教授など）共に拡大した。全スタッフは、基本的に毎週火曜日16:30からのスタッフ会議とFD（Faculty Development）研究会に参加し、お互いの情報交換やコミュニケーションを密にする。FD研究会では、教職大学院のカリキュラムに沿った様々な実践の計画と進め方について探求しつつ、毎回グループを編成して自らも様々な議論を通して実践に取り組んでいる。教職大学院のスタッフ同士のチームワークは、一貫して相互の立場や人格を尊重しながら、居心地の良い環境を形成している。

## 2 福井大学教職大学院の基本的な理念とカリキュラム

福井大学教職大学院は、従来の大学院における講義中心から脱却した方式を一貫して取り入れている。このことに最初院生は戸惑うと思われるが、大学スタッフは今までの粘り強い実践の中から、このカリキュラムこそが教職大学院において最も大切にされるべきものであることを確信していることが伺える。ここ数年教師受難の時代といわれる状況が続いているが、このような時代だからこそ教育という営みにかかわるあらゆる人々が、自らの教育にかかわる実践を省察し、その実践の過程で、構成－実践－省察－再構成という学びのサイクルを創造していくこと、そしてそれを通してこれからの学校教育の展望を新しく創造することを目指している。これらは、従来のいわゆるPlan-Do-See サイクル、Plan-Do-Check-Action サイクル、OJT（On The Job Training）活動、さらにはKJ法の示す一仕事のサイクル、課題提起－探検－野外観察－情勢判断－構想－具体策－手順化－実験観察－吟味検証－鑑賞のサイクルなどと相通じるものであるが、これらを内容的により深化させる学びのサイクルの確立を目指している。

教育においては、いかなる状況にあっても丁寧に実践を積み上げ、その過程において臨時的な視点で子どもの思いや教師の思いを探り、さらに実践を積み上げていくことが大切である。教職大学院で求められることは、このように常に振り返り省察するプログラムを不断に継続して行うこと、すなわち協働実践省察型FDを日常的に不断に遂行することである。本年度4月から私が参加した活動だけを見ても、カリキュラムがこの基本的な理念のもとに編成されていることが伺える。参加した活動の概略を辿る。

### 1 集中講座

本年度の夏期（7月、8月）に実施された集中講座における一連のプログラムは、この理念に沿う長時間の実践である。

#### （1）夏期集中講座

Cycle 1（3日間 それぞれ9:30～17:00）では、

「実践記録を読む－実践のプロセスへの問いと協働探究のコミュニティ」

をテーマとし、学校の紀要・教育系学部の教育実践研究に関する実践記録や実践研究論文をじっくり読み、実践の在り方や記録・論文の書き方について検討し合う。

第1日 それぞれがテーマを決めて実践研究を読み、グループでお互い紹介し合う。

実践研究は、長野県伊那小学校の総合学習の実践記録などである。

第2日 さらに読み進め、グループでさらに深めてテーマに沿って内容を整理する。

第3日 テーマに沿って整理したものを自分のテーマに沿ってまとめて文章化する。

文章化したものをクロス・セッションし新しいグループで紹介しさらに深める。

Cycle 2（3日間 それぞれ 9:30～17:00）では、

「実践の架橋理論の検討

－実践コミュニティ・アイデンティティ・専門職としての成長過程」

をテーマとし、事前に提示された文献一覧から各自1冊を選んでじっくりと読み、実践と実践、実践と研究をつなぐ理論枠組みについて検討し合う。

第1日 選んだテキストに沿って読み進め探究を体験し、グループでお互い紹介し

合う。テキストは「コミュニティ・オブ・プラクティス」（エティエンヌ・ウエンガーほか著）などである。

第2日 さらに読み進め、グループでテーマに沿って深め、整理する。

第3日 それぞれの探究を省察・整理し、表現する。さらにクロス・セッションで報告・検討し合う。

Cycle 3（3日間 それぞれ 9:30～17:00）では、

「実践研究の方法と組織－実践記録の作成と検討」

をテーマとし、Cycle 1、Cycle 2のセッションを踏まえて各自文章化してまとめ、院生は今後の長期実践報告（論文）作成を視野に取り組む。

第1日 実践の展開を振り返り、実践記録の構想を立てる。

グループで今後の進め方についてお互い話し合う。

第2日 実践の長期にわたる展開の稜線と重要な細部をとらえ直し、各自報告をまとめる。さらにまとめたものを各グループで確認し合う。

第3日 クロス・セッション①、クロス・セッション②でグループを変更し、それぞれ別のメンバーで報告・検討し合う。さらにもとのグループに戻り、このクロス・セッションをふまえながら確認し合う。

なお、各サイクルの中日には、スタッフが交互に担当して約1時間のミニゼミが講義形式で実施される。この9日間の一連のセッションを行うことによって、実践の構造と叙述の構造との関係を捉えることができ、それらの分析の構造を探ることができる。そして、このことによって自らの実践の構造と具体的な展開を探りながら、再構成していくサイクルを独自が作っていく。実践者同士がお互い言葉や思いを分かち合うことは、それぞれの実践を共有化していくことにもなる。また、実践者は、書きとどめるという行為の中で、自分の探求のスタイルをあらためて認識し、独自の取り組みを再構成することになる。新しいシステムを創っていくこの営みは、教師としての自らの生き方やアイデンティティを確認していくことにもつながるものである。

## （2）冬期集中講座（12月、1月）

ここでは詳細については省略するが、実践報告書作成の作業を中心にCycle 1、Cycle 2（それぞれ3日間）を実施した。なお、ここにおいてもそれぞれの中日には約1時間のミニゼミを実施する。1月のミニゼミは私が担当し、「学校改革と学校マネジメント」をテーマに、主に私立高等学校での取り組みの話題を中心に実施した。

## 2 合同カンファレンス

院生、スタッフ合同のカンファレンスは年5回行われる。各回テーマに沿った講義を受講し、グループのメンバーを入れ替えながら様々な実践について語り、聴き、読み、そして書くという行為を通して、自分自身の研究テーマについて深めていく。

### (1) 4月合同カンファレンス

テーマ：「長期的な実践の展望をひらくー長期研究報告書から実践の展開、実践者の歩み、コミュニティの展開を読み取る」

1日目 4月24日(土) 9:30~16:30

①基調講義 実践力を高める活動に取り組むに当たって、実践を「語り」「聴き」

「読み」「書く」、そして実践を支える理論を「読み」「受講することについて考える。教職大学院のベースになることについての講義である。

②長期実践報告書を読む。

③グループで感想を紹介し合う。

2日目 4月25日(日) 9:30~16:00

①実践記録を読み、その実践記録について自分の思いをまとめて書く。

②クロス・セッションでまとめて書いた内容を報告し合う。

### (2) 5月合同カンファレンス

テーマ：「長期的な実践の展望をひらくーこの春の動きを語り合い、省察を重ね、経験をつかみ直す」

5月22日(土) 9:30~17:00

①基調講義 定期的なカンファレンスの意味と合同カンファレンスの目指すものについての講義。

②クロス・セッション この春の動きを語り合い、経験をつかみ直す。

③公開講演会 西岡加名恵氏(京都大学准教授 教育方法学・カリキュラム論・教育評価論)による、「今後の評価の在り方についてー指導要領改訂のポイント」をテーマにした講演会。

④教育目標・評価学会中間研究集会

専門職として学び合うコミュニティを支える評価の構造について、福井大学教職大学院の取り組みを発表。

### (3) 7月合同カンファレンス

テーマ：「前期の展開をふり返り、課題をとらえ直すー夏のサイクルに向けて、課題を意識化していく」

7月10日(土) 9:30~12:30

①基調報告 夏の集中講座の概要と準備、および集中講座を有意義なものとするための心構えについての報告。

②クロス・セッション 前期の展開をふり返り、夏のサイクルで検討していきたい課題について各グループにおいてそれぞれ明確にする。

③個別相談 適宜実施する。

(4) 10月合同カンファレンス

テーマ：「他校の研究から学ぶー長期実践報告・1年目のまとめの構想に向けて」

10月23日(土) 9:30~12:30

- ①基調報告 セッションに入る前の話題提供として、他校の研究から学ぶことの意味に関してのスタッフからの報告。
- ②セッションⅠ 他校の研究から学んだことについて、グループ1で話し合う。
- ③セッションⅡ 長期実践報告・1年目のまとめの構想をグループ2で語り合う。

(5) 11月合同カンファレンス

テーマ：「若い世代を支えるー長期実践報告・1年目のまとめの構想に向けて」

11月27日(土) 9:30~12:30

- ①話題提供 院生の学校における、「若い世代を支え学び合う学校」実践事例の報告。
- ②セッションⅠ 若い世代を支え合う経験について、グループ1で語り合う。
- ③セッションⅡ 長期実践報告・1年目のまとめの構想をグループ2で語り合う。  
様々な人に実践を語って構想を練る。

これらの合同カンファレンスを通して、院生自身は自分のテーマについて、さらに拡がりをもって捉えることができ、このことはステップアップにつながっていく。

### 3 ラウンドテーブル

ラウンドテーブルは、コミュニティをさらに地域社会に拡大し、教育というテーマを異なる視野からも捉えるというアプローチである。本年度の大きなテーマは「実践し省察するコミュニティ」である。

(1) 第1回 Fukui Round Tables Summer Sessions 2010

「専門職としての実践力をどう培うか、学び合うコミュニティを支える大学の可能性」

第1日 6月26日(土) 13:30~17:00 「専門職として学び合うコミュニティ」

Session 1 専門職としての実践力を培う・・・全体会

さまざまな領域において、専門職としての実践力とは何か、そしてその力をどう培っていくのかの実践と研究が進められている。4つの領域それぞれの代表者が取り組みを語り、それを聞く。

Session 2 4つの領域：専門職として学び合うコミュニティ・・・4つの分科会

次の4つのグループにおいて、それぞれ発表者の取り組みを聞き討議する。

- ①専門職として学び合うコミュニティとしての学校における協働研究の展開と編成
- ②コミュニティの学習を支援する専門職
- ③特別なニーズのある人との係わり合いから学ぶこと
- ④医療・看護の専門職における実践力形成

第2日 6月27日(日) 8:45~14:20 「実践研究福井ラウンドテーブル2010」

Session 3 実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聴き取る

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で

一人一人が省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されていくことになるので、このような実践の展開を小グループで聴き合う。

#### Session 4 セッションを振り返り今後の実践交流とその組織の展開を探る

二日間のセッションを通じて聴き取ったこと、考えたこと、見えてきたことについて振り返って語り、次の実践につなげていく。

### (2) 第2回 Fukui Round Tables Spring Sessions 2011

この第2回においても、第1回同様、早い時期から内容と準備についてスタッフ会議やFD研究会において討議を重ね、プログラム全般にわたり何回も修正し計画を立てていく。その結果第2回はさらにネットワークを拡大し、福井から教師教育改革・専門職改革のデザインを発信することを目指して次の内容で行われる。

第1日 2月26日(土)

「専門職として学び合うコミュニティを培う

ー日本の教師教育改革のための福井会議 2011」

#### Session I 実践に学び合う広場

Zone A 学校：新しい時代の学びを拓く・・・学校拠点の実践研究

Zone B 教師：教師の力量形成を支える・・・教師教育改革の実践

Zone C コミュニティ：職場と地域の学び合うコミュニティ

#### Session II シンポジウム1 社会力＝新しい時代に生きる力を育てる

シンポジウム2 教師教育改革の展望

シンポジウム3 アジアの教師教育

#### Session III フォーラム テーマ別の話し合い問いを深める

Zone A 学校：学校拠点の実践研究の接続的な発展

Zone B 教師：教師教育改革の実践と展望

Zone C コミュニティ：専門職の力量形成とコミュニティ

#### Session IV 教師教育改革・専門職改革のデザイン

：福井からの発信ー実践的な展望をひらくために

第2日 2月27日(日)

「教育改革実践研究福井ラウンドテーブル2011」

#### Session V 協働研究 展開を語る／プロセスを聞き取る

小グループ(6人程度の固定メンバー)で、

①はじめに、②自己紹介、③報告Ⅰ、④報告Ⅱ、⑤報告Ⅲ

の手順で、互いの実践の長い道行きを語り、展開を支える営みをじっくり聴き、考え合う。

学校の枠組みを超えたこのラウンドテーブルは、実に多くの視点からさまざまなことをお互いに学ぶことができるもので、大変貴重な実践である。

## 4 拠点校・連携校

福井大学教職大学院の教職専門性開発コース(ストレート・マスター)の院生は、インターンシップで週3回属

する拠点校で実践を重ねている。一方、スクールリーダー養成コースの院生は、在籍する学校（拠点校および連携校）と深くかかわりながら実践および研究を進めている。この拠点校および連携校には、教職大学院の担当スタッフも赴き、学校における会議、教科の会議、関係者との話し合い、研究授業、研究発表会などさまざまな活動に直接参加し、協働研究を進めている。この学校拠点方式は、福井大学教職大学院の大きな特色となっている。私も、スクールリーダーコースの T 先生（F 高等学校 国語科）や S 先生（U 高等学校 数学科）の学校に行き、公開授業や授業研究会に数回参加させていただいた。学校と大学との交流がこのような形で展開できることは、これからの教育を考えるときどちらにとっても大変心強いものであることを強く感じた。また、公開研究発表会などにおいては、担当スタッフのみならず教職大学院の全スタッフができるだけ参加する。私も何回か参加したが、それぞれの学校での新しい取り組みは大変興味深く、スタッフ会議においても話題にし有意義であった。

各院生は、教職大学院における「語る」「聴く」「読む」「書く」実践を不断に継続しながら、それぞれの所属する学校でさらに実践力を高め、最終年度末までに「長期実践報告書」にすべてを表現する。この集大成は、院生本人はもとより教師教育全体の大きな財産となる。

## 5 FD 研究会（スタッフによる研究会）

前期、後期それぞれにおいて、毎週火曜日の 16:30 より、スタッフ合同のスタッフ会議と、引き続き FD 研究会が行われる。特に FD 研究会は、スタッフ同士の研究会で、各回小グループを編成し、テーマに沿った発表をローテーションで行い、テーマをもとに議論を進める。この研究会によって、スタッフ同士のコミュニケーションが深められ、教職大学院の各プログラムの進め方や内容についての共通理解も深められる。また、スタッフがそれぞれの実践を省察することにもなる。この FD 研究会は、教職大学院が取り組む協働実践省察型 FD の展開をスタッフ自らが実践するというプログラムで、スタッフの力量形成につながるものである。私が発表した主なテーマをあげると次のものである。

- （1）教職大学院教職開発専攻 Y さんの、学校改革実践研究報告（No.76）

「子どものコミュニケーションを支える～表す力、伝える力、受け取る力～」  
を読んだ報告。

- （2）私の教師生活の歩み。

- （3）スクールリーダーコース（M1）T 先生（F 高等学校教諭）の拠点校の展開と課題

「F 高等学校におけるスクールリーダー院生の展開と課題」の概要。

二度の公開授業、学校設定教科「研究」の取り組みの一端についての報告。

- （4）私の「教師教育研究 Vol.4」原稿案の検討。

それぞれ資料づくりにはかなりの時間を要したが、これらの内容をもとにグループで報告し、テーマについて話し合いを深めることは有意義であった。

## 6 福井大学教職大学院と専門職としての教師の実践的力量的形成

福井大学教職大学院は、大学研究者、実務家教員、大学院院生、学校、地域社会との様々な実践を通して、専門職としての教師の実践的力量的形成に大きく寄与するものであると言える。本年度私が参加した主な活動をあげたが、いくつかの活動を体験してみて、学校改革を進める中でこのテーマを醸成していくことは、今後ますます重要になってくることを感じた。その一貫したコンセプトは、「実践し省察するコミュニティ」「専門職として学び合うコミュニティ」作りで、このコミュニティを形成する中でのお互いの力量形成である。教職大学院における数々の実践

は次のようなものを育み、それぞれの学校、教員、生徒、保護者さらには地域社会へと波及していくことになる。

- ①校種を超え、教師としての経験年数を超えて、お互いの取り組みをたっぷり語りそしてじっくりそれを聴けることは、教師の省察・研究能力アップにつながる。
- ②院生の作成する長期実践報告書は、それぞれ実践の思いが凝縮されたもので、それらを時間をかけて「読み」そして自分の思いを「書く」という作業は、自分自身のこれまでの歩みの省察を通して新たな創造へと導く。
- ③スタッフ間における大学研究者と実務家教員とのコラボレーションは、実践と理論において新たな融合と変化をもたらし、教職大学院の教育全体に大きなエネルギーを生む。
- ④学校に大学教員が入るということで、学校は変化する。
- ⑤学校には学習をはじめさまざまな活動を支えるコーディネーターやファシリテーターが必要であるが、身を以て体験する教職大学院の実践はこの人材育成につながっていく。
- ⑥教職大学院におけるカリキュラム改善および授業改善の活動は、学校における学習の協働組織編成の在り方や改革へのマネジメント力につながっていく。
- ⑦教師の力量形成のために何をなすべきかということに意識して向き合うことは、自分自身専門職としての教師のアイデンティティを確立していくことになる。
- ⑧学校と教職大学院との連携は、スクールリーダーの学ぶ学校の環境改善に波及する。
- ⑨実践のための架橋理論をじっくり読み深め、議論することで、ぶれない実践ができるようになる。
- ⑩教職大学院のカリキュラムの中には教科指導に関する具体的な指導内容が無いことに不安を持つ院生もいるが、教職大学院一連の実践を進めていく過程で教科の専門性を高めたいという思いがさらに高まり、このことは授業に対する意識改革につながる。

これらのことだけでなく、教職大学院でのさまざまな実践、コミュニケーション、ネットワーク、人間関係などから醸成されるものは、すべて教師の力量形成の確かなプロセスとして計り知れない大きなものである。

## 第2部 自らの実践を振り返る

### 1 教師の力量形成を育むもの

学校において、教員の力量形成は教育力を高めるための切実な課題である。ところが、学校という組織において、教師の力量形成の問題をどのように系統的にプログラムし、実践していくかはなかなか容易ではない。どの学校においても、初任者の研修、校内研修、授業研究、校外の研修講座・研究会への参加、その他の研修や様々な教育活動において実践を通して行われている。この内容は近年いろいろな取り組みがなされ改善されているが、日常多忙な教師にとってはどちらかといえば単発的なものであり、継続して取り組んでいく環境にはない。従って力量形成については、教師個人の取り組みに期待しているのが現状ではないだろうか。一方学校では、教職員同士、生徒、保護者、さらには地域社会など多くのコミュニティが形成され、それぞれの内部におけるコミュニケーションや相互のコミュニケーションをいかに深めるかが大きな課題で、そのためのコーディネーターやファシリテーターの役割を担う人材育成は重要である。この課題を乗り越える試みは、教師の力量形成につながり、ひいては学校の教育力を向上させていく。

福井大学教職大学院における教師の実践的力形成に関するコンセプトとアプローチは、この学校の現状を打破する取り組みとして期待できるものである。教職大学院の合同カンファレンスや集中講座における小グループでの話し合いでは、異なる校種の先生方（スクールリーダー養成コース）から様々な取り組みや課題を聴き、それについて討議し書き留めることで、それぞれが貴重なものを得るという体験をする。このようなアプローチがいかに大切であるかは教職大学院での体験を通して感じることであるが、この実践を学校に取り入れることができれば学校における諸教育活動は言うに及ばず学校の教育力を高めていくものとなる。

教師が自らの教育実践を振り返って物語ること、そしてコミュニティの中でその語りに触れることは、語り手にとっても聴く側にとっても必ずや新たなものを生成していく営みになる。学校教育における不易な部分は、過去の歴史に学ぶところが非常に多い。今の加速度的に変化する時代だからこそ、教師自身が先を追いかけるばかりでなく、歴史を振り返り、先人の足跡を辿る行為も大変重要である。この取り組みは、教師集団の持てる力を引き出し、学校コミュニティにおけるコミュニケーションを向上させ、さらには過去、現在、未来をつなぐ貴重なものとなる。そして、その学校風土は、自ずと学び合う学校コミュニティへと進化することになる。教師が自分の歩みを表現したり聞いてもらったりする機会は、あるようで実際にはあまり無いのではないだろうか。教師には、それぞれ小グループでよいから、安心して自分を表現できる場が必要である。学校の組織の中で、このような時間を共有することができれば、それは大きな変化を導き出す。

教師の力形成は、教師一人ひとりの日々の実践の積み重ねによって蓄積されていくもので、その長期の実践を共有することができればさらに広がりをもってコミュニティ全体に波及していくものである。教職大学院では多くの実践から、教師の力形成はまさに一步一步の大変な時間とエネルギーを必要とするものであること、そしてそれぞれの学校で、工夫し、継続しやすい試みを粘り強く進めていくことの大切さをあらためて学ぶ。

## 2 実践の歩みの概略を振り返る

私は昨年3月に、長かった43年間の教師生活にピリオドを打った。この退職を機に、蓄積した教育関係の資料などの整理や処分する作業を始めた。この作業を進めていくことは、些かセンチメンタルな気分になるが、これまでの教師生活を振り返る時間を与えてくれた。さらに自分を振り返ると同時に、いくつもの心に残ることを懐かしくピックアップすることでもあったので、抜け落ちているものやこれから後に思い浮かんでくるものも数多くあると思われるが、とりあえず今思い出すものをリストアップしてみることにした。これらを思い浮かべていくと、実に多くあることに驚くと同時に、その一コマ一コマに関したことが走馬燈のように脳裏を過ぎっていく。そして必ずといっていいほど生徒たちと一緒に苦楽を共にした先生方やお世話になった方々が出てきて、思わず表情が柔らかくなる。随分古い思い出であるが、私が大好きだった野球の試合で劣勢に立ちもうこれでお終いというぎりぎりの状態の時、自分が同点打を打って次につなぎそして勝利した喜びが、今も消えずに鮮やかに蘇り時折元気を与えてくれることがある。これと似たような気持ちになるから不思議である。出てくる言葉を紙片に記し、配置し、それを何層にも分け、最後に大きなカテゴリーに集めていくと、学習指導に関すること、生徒指導や進路指導に関すること、教育関係機関に関すること、管理・運営・経営に携わった時代のこと、そして私立学校に関することの5つになった。「お礼まいり」（随筆集）という本の著者徳岡孝夫氏は、「過去は終わったのではなく生きている、過去に向かうことで新たな光に会える」というようなことを述べているが、この一連の作業ではこのことに似た体験をし何か一つ将来に向けてのエネルギーを与えてくれているように思えてくる。実際は非常に沢山の言葉で振り返ることになるが、あまりにも冗長になるのでここではそれらを統合したもので振り返る。あくまでも私事で、拙い実践の断片である。

## 1 学習指導—教師として自分自身の学ぶ意欲をどう高めるか

- ① 熱心な先輩・同僚教師・生徒
- ② 教科指導(数学、数学教育)
- ③ 研究会活動(公的・私的)
- ④ パーソナルコンピュータ(進化)
- ⑤ 知的生産の技術と情報整理

特に大きいのは生徒との出会いである。生徒によって自分の学ぶ意欲をかき立てられる経験は数限りがない。長期休暇に入る時、「数学に関する本を読んでレポートを書く」という課題を1、2年生に出していたが、今読んでみるとその高校生時代のレポートにはかなりの内容が書いてあって目を見張るものがある。現在50歳前後の卒業生のクラス会の時などに披露すると大喝采で、高校時代に戻れると好評であるし、私自身もその当時の教師としての自分を振り返ることができる。また、教師側が期待している解答ではなく、思いもつかないようなアプローチで得意げに解答を示す生徒に思わず拍手喝采で、もうそこまで到達しているかと驚き、嬉しくなる経験は多い。

ここ半世紀弱の間のコンピュータの進化は、それを語ればきりがない。FORTRAN や COBOL などのプログラム言語を用いる電子計算機は、大型で、特別な学校以外は使用することはとてもできなかった。私が教師になって最初出会ったものは、昭和40年代前半、突然業者が数学の教材にと学校へ持ち込んだビジコン社(BISICOM社)の卓上計算機のデモ機であった。初めて目にする机にのる大きさの計算機にわくわくし、独自のプログラム言語を用いながら夢中になって簡単なアルゴリズムをプログラミングし、教師も生徒も出力される結果に一喜一憂したことを鮮明に思い出す。この計算機以後3、4年ほどするとSHARP製の磁気カードを用いた卓上計算機が学校にも配置できるようになり、異動した学校では数学の教材として使用できるようになった。しかしパーソナルコンピュータが、まだ今のプログラム電卓の能力しかなかった時代である。一人の生徒が超越数 $e$ の多桁計算のプログラムを徹夜で作成して、ふらふらになりながら学校へきてプリンターで出力し大喜びした場面などは鮮やかに蘇る。その後、このパーソナルコンピュータは教育の世界でも、加速度的な進化をする。最初はPet、Olivettiなど海外の製品が主流であったが、日本の企業も、SHARP、SORD、NECなど各社がより高性能のものを次々と発表していった。学校教育では、数学教育をはじめCAI(Computer assisted instruction)やCMI(Computer managed instruction)において、無くてはならないものとなっていった。福井県においても、熱心な方々の呼びかけでCAI研究会という勉強会が発足し、教育関連の各分野から会員も増え一つのコミュニティを作って情報交換を行った時代がある。私も会員として様々な刺激を受けた。そのような時代からネット時代に突入した現代まで、まさに夢のような進化の有り様と一緒に生きられたことは幸せであるし、あらためて人の能力の凄さを身近に感じ体験できていることは幸せである。これからどのような時代になっていくのだろうかと思案すると、夢も膨らむ。

さらに、教師になってから私がずっと楽しんできたのは、知的生産の技術という分野である。教師に成り立ての頃出会った、梅棹忠夫氏の「知的生産の技術」や川喜田二郎氏の「発想法」「KJ法」などは、時代が変わった今も私のバイブルで、カードやファイルや情報整理など何度となく改良し作り変えて利用してきているが、この楽しみはこれからも続けたいと思っている。特にKJ法は、これまでたくさん助けてもらっている。アトランダムに浮かんでくるアイデア・思い・情報などを、時間をかけて類似性を頼りに集めていく作業を通して、思いがけないことが浮かんでくる喜びは大変大きいものである。時間がかかり過ぎるといった批判はあるが、フィールドワークから創造されたこの手法はデジタルの時代だからこそさらに価値が深まっていくのではないかと考えている。今後も様々な

ことに応用し、大切にしていこうつもりである。これからの時代、デジタルとアナログをバランスよく使っていくことが大切になるのではないかと考えている。

この学習指導の領域は、行き着くところ、私自身の学ぶ意欲をどう高めるかという大きなテーマで、力量形成との関連ではエンドレスのテーマである。

## 2 生徒指導・進路指導—生徒の人生にかかわるという重さにどう向き合うか

- ① 担任業務・学年会・保護者
- ② 校務分掌（教務・生徒指導・進路・進学・保健・生徒会ほか）
- ③ 生徒の意欲と学習の関係（生徒の意欲をいかに高めるかは永遠のテーマ）
- ④ 進路指導は教師の哲学（進学指導、就職指導、キャリア教育）
- ⑤ 部活動と学習意欲（バスケットボール部、野球部、ソフトボール部、数学研究部）
- ⑥ 長期研修（東京：国立教育研究所、半年間）
- ⑦ テストで能力が分かるか（テスト問題をいかに作るか、評価、テスト理論）
- ⑧ 伝統校と新設校

O 高等学校 普通科、商業科、家庭科

K 高等学校 普通科、理数科

KA 高等学校（新設校）普通科、情報処理科、経理科

新しい学校を創っていく、成長する学校、教師が成長する学校の教育力

教師の力量を高める取り組み、地域の期待と支援、町の支援

ミックスホーム制（クラスとホーム、ホームは各学年でミックス）

伝統校と新設校で、無我夢中で取り組んできた多くのことを思い出す。勤務校による違いはあるが、それぞれにおいて楽しく多くのことを学んだ。教科指導以外の分野でも、年齢を重ねるごとに新たな課題が生じてくる。その中で、特に生徒の人生に関わるという重さにどう向き合うかは本当に大きな課題である。出会った生徒たち、そして先生方や保護者などの人々とは、必ずまたいつか再会する。その時、その人々と良い出会いがしたいという思いを強く持って接したいと常々心に留めている。生徒指導・進路指導という問題は、結局自分自身の教師としての生き方とか在り方の問題を考えることになる。この問題においては、学校を離れて一人で取り組んだ東京での半年間の長期研修（後述する）が、私の大きなターニングポイントとなった。長期研修を通して、教師の研修というものを初めて身を以て体験することができたことは幸せで、大きな財産になっている。その時二度と無いこの体験を残しておきたいと、暑い中宿舎に籠もり苦勞して書いた 200P ほどの冊子は、今手にとって見ると拙いものであるが愛おしく、新たな自分に会える気がする。

その数年後、新設の KA 高校勤務になり、学校を最初から創っていくという集団に加わった 6 年間の貴重な体験は、後の教師生活に大きな影響を及ぼすものであった。

## 3 福井県教育研究所—臨床的教育実践の中で学校教育の抱える重要課題を学ぶ

- ① 児童生徒理解（マイライフの開発・実施、予防的・開発的教育相談活動）
- ② 教職員研修講座（教育相談研修、心理検査研修、進路指導研修、出前研修）
- ③ 教育相談事業（来所相談、電話相談）

- ④ 適応指導教室(フレンド学級)
- ⑤ 事例研究会 (所内ケーススタディ、内地留学生の受け入れ)
- ⑥ 研究(研究紀要、研究発表会)
- ⑦ コンサルテーション事業 (学校、地域)
- ⑧ 広報活動(刊行物「教師のための教育相談 Q&A」など、新聞、雑誌ほか)

生徒を前にした教科指導・生活指導が主だった教師生活からの転換で、一抹の寂しさと戸惑いはあったが、長期研修で経験したことがこの転換を比較的スムーズにした。二度目の勤務は9年間という長期に及び、新規事業にいくつも取り組み課の業務も大きく変化した時代であった。相談課においては、10数名の校種や地域の異なる教員が常に同じ部屋に同居し、話し合い、会議をし、考え、行動し、振り返り、アイデアを出し、助け合うという生活を共にして仕事に当たることによって、辛い仕事だからこそ皆で楽しくやっという思いが自然に強くなってくる。明日また同僚と会えて楽しく話ができる、このような気持ちが醸成され、勤務するのが楽しくなる職場は理想的である。コミュニティの有り様で、人の気持ちは大きく変化する。この職場で人間関係を構築しながら生活すること自体が、かけがえのない研修である。時にはメンバーの総意で、合宿、懇親会、落語会、音楽会、小旅行、イベント参加など業務外の活動も取り入れ、スタッフお互いのメンタルヘルス面にも配慮しつつ、コミュニケーションを大切にしながらコミュニティを形成していった。この校種を超えたネットワーク、コミュニティはさらに広がり、教育の本質について考えさせられることが大であった。また、個人的には、教科指導を離れた期間における数学や数学教育への取り組みを継続させるために、課の業務や個人研究とリンクさせてこの課題を別の角度から取り組むよう心がけた。この機関での長い勤務を通して、教育研究所の在り方としては、福井県の学校教育のシンクタンクを目指すという思いを強く持った。時代は変わったが、今後に期待することは大きい。

#### 4 管理・運営・経営—システムの力は人のつながりの力であることを学ぶ

##### ① 課長 福井県教育研究所(相談課、教育相談課)

コミュニティ形成とネットワークづくり

教育相談関連事業推進 予防的相談事業の推進、集団体験活動パイロット事業

教育相談事業と学校への還元 学校との連携強化、所内他課との連携

研修講座の新しい展開、管理職研修講座

全国、東海北陸教育研究所連盟におけるネットワーク

教職員等中央研修講座(校長・教頭研修講座 文部省主催)参加

平成7年1月5日(木)から3週間参加(1月17日に阪神大震災が発生した)

国立教育会館筑波分館での合宿研修 全国の方々とのネットワーク

##### ② 教頭 K 高等学校

学校活性化 カリキュラムの充実、環境整備、校内人事、ホームページの充実

理数科の復権 理数教育の充実、広報活動

P T A と同窓会活動の活性化

国際交流事業 姉妹校との交流

福井県高校生の国際交流事業

アメリカ ニュージャージー州 ラムジー高校、ニュープロビデンス高校など

生徒45名と訪問 副団長として参加

（世界貿易センターを見学したが、この半年後2001.9.11の悲劇発生）

③ 校長 O 高等学校 （福井県高等学校校長協会教育課程委員会）

本校

週完全5日制と福井県学区撤廃に向けての対策と取り組み

カリキュラム再編成 総合的な学習の時間と教科情報

進路指導の充実 学問発見講座、職業発見講座、大学発見講座

文化面の環境整備 図書指導、学校の校史コーナー、コミュニティーホール活用

市教委、中学校との連携 学習面での連携、教科別中高合同研究部会の組織と活動

同窓会活動 創立100周年準備、会報の充実と広報

定時制（昼間二部制）

定時制教育の充実、人事異動と教員配置、三修制の特色

④ 校長 T 高等学校 （福井県高等学校校長協会副会長・会長）

本校・定時制・分校の連携

合同会議実施 生徒指導での連携協力、3機関の人事交流、教科会の連携

特色ある学校づくり 活性化プラン、学力向上、授業研究

危機管理 徴収金の適正支出問題、交通事故防止活動、報告・連絡・相談体制

P T Aと同窓会による支援 学校支援体制、全国ネットワーク（各支部の活動）

福井豪雨ボランティア活動

本校

福井県一学区制に伴う対策 中学校との連携

進路指導の充実 進路指導室・進路資料室の整備 図書館の機能アップ

オープンスクールの充実と広報活動

理数科の充実 カリキュラムの改善、全国理数科校長会との連携

スーパーサイエンスハイスクール取得に向けての取り組み

文化芸術面・学校行事と会館利用、空調設備、土曜補習、特別講演会実施

定時制（単位制）

単位制教育の充実 生徒増に伴う教育体制整備、人事交流

教育相談体制整備 校内事例研究会、スーパーバイザー配置、保護者相談の実施

分校

分校の活力とエネルギー 中高一貫教育、生徒募集と広報活動、人事交流

生徒指導体制 集団指導、保護者相談会、

地域との連携 地域連絡協議会、地域貢献活動

連続したこの時期は人事異動の面で予測がつかない目まぐるしい時期で、どちらかといえば1年ごとに目標を据えたアウトプットの時代であって、リーダーシップとマネジメントとは何かについて深く考えさせられた。これまでもお世話になった先人の言葉、行動、振る舞いなどは大きな財産で、難題に出会う度蘇ってくる貴重なものである。人のつながりの力は、不可能を可能にする。本当に人は宝である。「教育は人なり」と言われるが、この立場に

立って、組織の中の人はずべての人がかけがえのない人材であるという思いで、常に感謝する気持ちを持ち続けることが大切であることを痛感する。どの人が欠けても組織はスムーズに動かなくなる。縁の下の力持ちになっている方々への気配りと感謝の気持ちを、常に心から表していくことはとても重要である。人事は末端へいく人事ほど重要で、時間をかけなくてはいけないと思っている。次の箴言は大切にしているものである。

- 一 人の長所を始めより知らんと求むべからず。人を用ひて、始めて、長所の現るるものなり。
- 一 人は、その長所のみを取らば即ち可なり。短所を知るを要せず。
- 一 己が好みに合う者のみを用ふる勿れ。
- 一 小過を咎むる要なし、ただ、事を大切になさば可なり。
- 一 用ふる上は、そのことを十分に委ぬべし。
- 一 上にある者、下の者と、才智を争ふべからず。
- 一 人材は、必ず、一癖あるものなり。器材なるが故なり。癖を捨つべからず。

(荻生徂徠)

## 5 私立学校—私学教育を通して学校教育の拡がりを学ぶ

学校法人 K 学園、FK 大学教養部特任講師

兼務 FK 大学附属 F 高等学校、同衛生看護専攻科校長（4年間）

兼務 FK 大学附属 F 中学校校長（2年間）

F 高等学校

学校改革と学校マネジメント

建学の精神と文武両道 スクールアイデンティティ

多学科・多コースの改編 第1期「普通科が新しく生まれ変わります」

6 学科 11 コース→3 学科 13 コース 普通科、工業科、衛生看護科・専攻科

正規の教員と非常勤講師のバランスを整備

教育カリキュラム 普通科教育の充実、授業の充実、公開授業、授業研究、  
定期テストの重要性、学習評価

キャリア教育 キャリア教育の推進を中心に据える、キャリア教育課設置、  
生きる力を育む基礎学力、キャリア教育のプログラム導入、ワークショップ（渡辺三  
枝子氏 筑波大学キャリア支援室）

キーワードとして強調

進路支援システムの構築 進路指導部の強化、生徒の夢を実現させる指導

進学指導センター新設 核になる学習センター・キャリア教育センター

教育アクションプラン・プログラムの策定

募集活動の充実 募集企画課、学習・文化芸術面の強化

大学・中学との連携 中学校の学校改革、生徒数増加に向けての戦略

教育の要に生徒指導 ゼロトレランス、挨拶運動、生徒会活動の活性化

教育相談支援体制 保健室二人制、教育相談室、カウンセリング研修

教職員のメンタルヘルス スーパーバイザー メンタルヘルス研修会

国際交流 姉妹校提携、オーストラリア パース

セークレッド・ハート校、マータ・ダイ校2校との姉妹校関連事業

修学旅行で訪問（団長として参加）、語学研修留学、教員の交流事業（3ヶ月）

学校評価 授業評価、人事考課

学校クオリティーの向上 日々の授業に対する意識の向上と取り組み

危機管理 未履修問題とその解決、生徒への安全指導

多学科・多コースの改編 第2期「進学をキーワードに」

3学科7コース、特別進学科、進学科、衛生看護科・専攻科

学びを中心に、進学：学問の道に進み励むこと

中・高連携の強化、6年一貫教育の推進

衛生看護科 5年一貫教育（専攻科2年間）県下の高校で唯一、看護師国家試験

スポーツ・文化芸術部門 全国を視野にさらなる飛躍を目指す

公立学校をリタイアして私学教育に数年かかわることができたことは、実に貴重なものであった。大学の教養部ではこの間、微分積分学と線形代数学の講義を通して、高校の数学教育のあり方も考えさせられとても楽しいものであった。附属高校の校長を4年間兼務（うち2年間は附属中学校の校長も兼務）したが、校長として外部からはただ一人で赴任し、何よりも教師集団の片隅にいかに入れてもらうかが重要課題であった。「建学の精神」という大きな教育理念のもとで、人間教育を柱に特色ある教育を展開する一つの私立高等学校に身を置くことになり、今まで見えていなかった私学の教育は、私にとって毎日が学びの連続で新鮮であった。福井県の私立高校には、1学年ほぼ2,000人も多くの生徒が学んでいる。福井県の教育問題を話題にする時は、公立学校だけでなく公立・私立を総合して語ることの大切さを思う。

今の時代、不易なものを大切にしながらも、常に次の時代を見据えて新しいことに挑戦し進化し続ける学校であることは不可欠であるし、この間に学園本部の理解も得て行った第1期、第2期の学校改革は、これまでのF高等学校の歴史の中でも最もドラスティックな改革であった。しかし、学校改革と学校マネジメントの中核は、あくまでも子ども・生徒たちで有らねばならない。学校教育において、「迷ったら子ども・生徒に戻ろう」と常に言い続けてきているが、今の目まぐるしく変化する時代、大人だけでなく生徒たちにとっても大変なストレス社会である。しかるべき人に相談することができる能力を身につけることは、それはまさしく生きていく力である。時代は様々な変化を余儀なくさせるがこのような時代だからこそ、私たち教師は生徒たちに対して、「いろいろなことを相談したり話を聞いてもらったりすることは何も恥ずかしいことではない、生きて働く資質・能力を身につける上でもとても大切なのだ」という基本的なことを、両手を広げて常に受け入れる気持ちを持って伝え、行動していかななくてはならない。学校改革と学校マネジメントにおいて、学校は生徒一人ひとりの個を大切に作る姿勢をいたる所に配置していくことを忘れてはならないと考えている。何よりも生徒・保護者と教師との信頼関係が全てである。

私にとって、この責務を果たすため、加齢による体力と気力の衰えをいかに克服するかが大きな課題であった。校長を兼務した4年間は私の教師生活の最終章となったが、私を支えていただいた私学の温かい先生方と出会えたことは本当に大きな財産となった。

### 3 研修と教師の力量形成－長期研修

4月から教職大学院で、スタッフ同士の会議・FD研究会、合同カンファレンス、集中講座、ラウンドテーブル、

拠点校・連携校とのかわり、公開研究発表会などの活動に参加してきた。どの活動においてもスタッフの先生方、院生、学生、その他の参加者を問わず、非常に前向きな熱意が感じられ、何かとても頼もしく明るい気持ちで参加させていただいている。特に、小グループでの Session や FD 研究会ではたっぷりいろいろな話が聴けて、自分自身の教師生活を振り返るきっかけにもなっていてありがたい。これまでの自分の拙い歩みの概略を辿ってみたが、これを契機にもう少し具体的にポイントを絞って教師生活のいくつかを振り返ってみようかという気持ちにもなってきた。教師生活43年間というのはあまりに長すぎて、どこに、何に焦点を当てて振り返るかとなると困難を極めて筆が止まってしまう。この1年間は、スクールリーダーコースの院生である先生方との話し合いやスタッフの方々とのFD研究会における話し合いなどを通して、教職員の研修と教師の力量形成について考えさせられることが多くあった。それは教育研究所での勤務が長く、教職員の研修講座にも多くかかわってきたことによるものと思うが、福井大学教職大学院におけるさまざまな実践が、どうしても私の勤務歴の中での実践とオーバーラップして、私にとって研修とはどうだったのだろうと振り返ることが多くあったからである。

そこで今回の教師教育研究 Vol.4 では、特に教育研究所勤務以前に私が体験した「長期研修」をピックアップして、少し振り返ってみたいと思う。この長期研修は全くプログラムのないもので、自分自身が最初から切り開いていくという体験は、「教職員の研修」について別の視点から考えさせられる貴重なものであった。

## 1 生徒指導と教育相談

思いおこせば、私が教職員の研修というものについて意識するようになったのは、1981年（昭和56年）である。教師になって15年目の37歳、K高校に勤務して9年目に入る年である。この前の年は、私は3年間変わらず担任をし、思い出の一杯詰まったクラスの生徒たちが卒業するという、私にとっては大きな節目の時であった。卒業という晴れ晴れとした清々しい気持ちを生徒とともに分かち合っただけで別れたが、私の心には重くのしかかっているものがあつた。3年間楽しいことも苦しいことも一緒に過ごしてきたクラスの中の、一人のかけがえのない生徒Y君が、卒業を目前にして脳腫瘍という難病で投薬治療の甲斐なく他界するという、ご家族はもとよりクラスメイトにとっても私にとっても、本当に信じられない悲しい出来事があったからである。発病してからあまりにも早いこの別れを思うと、今も心が痛む。この出来事の中で、悲しみに沈むご家族への気配りや、さまざまな行動を次々と自然発生的に行っていくクラスの生徒たちの様子を目の当たりにし、感動すると同時に生徒同士の3年間のつながりの深さと、悲しみを現実のものとしそれを乗り越えようとする生徒たちの成長を強く感じ、胸が熱くなった。そして、それは私の悲しみを救うものであつた。このクラスのつながりは、30年経った今も続いている。

この辛い別れは、自分自身に対して、教師としての立ち位置や、人として教師としての成長とは何なのかなど、さまざまなことを深く考えさせてくれるものであつた。このような時期に、長期研修に出るようというお話を校長先生からいただき、その年の4月から9月までの半年間、東京都の国立教育研究所（現在の国立教育政策研究所）に籍を置き、世田谷にある福井県の宿舎に身を置きながら、半年間の長期にわたる研修を行う機会に恵まれた。主な研修の内容としては、これからの時代を見据えて、主に「生徒指導と教育相談」を中心に研修することであつた。15年間、ただ夢中で、学習指導(教科数学を中心に)、担任業務、校務分掌における諸業務、生徒指導、進路指導、部活動などにかかわってきて、それなりの充実感があつたし、教師としての在り方も何となく意識しながらきたが、その当時の意識はまだまだ表面的な薄いものであつたように思う。この話が舞い込んできた時、気持ちの中にいささかの動揺はあつたが、しかし、前述のY君との別れは、鎮魂の意味でもこの研修をしっかりとしたものにしなくては行けないという決意を与えてくれた。

半年間の研修はまさしく私を変えてくれたものであつた。当然私にとっては未知の世界で、初めてスタートする県の事

業ということで、先人がいないので手探りで進めなくてはいけないものであった。全く知らない土地で、新しいコミュニティづくりを自分から開拓して研修しなければ何も始まらないという体験は、さまざまな難問を生じながらも、いやが上にもいろいろなことを考えさせてくれるものであった。

### （1）国立教育研究所

今でもはっきり記憶しているが、国立教育研究所（以下 国研）初日の挨拶では、担当の指導普及部企画室長の先生もお忙しく、研修生が一人来たという程度で、研修メニューがあるわけでもなく、ただ挨拶をさせていただいてだけで特別な研修生用の部屋も無く居場所すらない状況で、これから一体何をやっていけばよいのかと今後に向けて大変不安が募った。数日後、担当の先生や研修期間は異なるが、富山県、福島県、山形県などから若干名、そして何よりも嬉しかったのは福井県から小学校教諭の F 先生がいらっしやるのがわかり、その先生方との交流も徐々に始まっていった。F 先生は宿舎も同じになり、研修時はもちろんのこと研修を終えても公私ともに本当にお世話になり、いろいろなことを教えていただいた。国研主催の「これからの教育を語る会」の活動には、研修生は全員常に参加した。研修終了後、福井県の支部も結成されて定期的な勉強会をすることになったが、F 先生はずっと中心的に会をリードしてこられた。残念なことに数年前お体を悪くされて帰らぬ人となってしまわれたが、その当手を振り返ると何かと支えていただいた F 先生のごことがたくさん思い出される。

国研は現在の国立教育政策研究所の前身であるので、時代は変わっても担っている役割はその当時も現在と同じ類であったと思う。教育の研究を行いながら全国の教育委員会や学校とも連携し、様々な研究や調査と教育施策を提案し実施している。図書館の施設も充実していて、図書館長の O 先生には特にお世話になった。この先生のお陰で全国の特色ある学校の取り組みを紹介していただいたり、訪問させていただいたりした。研修生をととても大切にいただき、「これからの教育を語る会」は東京以外でも行われ様々な交流を持てた。都道府県によっていろいろ異なる取り組みが行われていて、大変刺激的であった。国研での研修は、研修会や自然にできあがった研修生同士のコミュニティでの交流を通して、時には研修期間によるメンバーの入れ替わりがあったが、とても居心地の良いものであった。

### （2）都立教育研究所と筑波大学

「生徒指導と教育相談」を中心のテーマとした研修であったので、この研修をどう進めるかをいろいろ考えた。理論面について多くの資料等は国研で揃っているが、具体的な活動は別のところをお願いしなくてはとても進められない。様々な情報を得る中で、都立教育研究所（以下 都研）の相談部が「学校教育相談」の先駆的な活動を行っていて、前部長 K 先生の著作にも事前に目を通していたので、このところで研修の一部をお願いできないかと考えた。全く面識のない、誰の紹介も無いところへ一人で出かけてお願いして、果たして受けてくださるかどうかわからないがとにかくお願いしてみようと思いついた。あらかじめ電話でアポイントを取り、直接お会いして事情を話しお願いをしたが、他県の研修者がいきなりお願いしても二つ返事で許可をいただけるものではなかった。聞いていただくだけでも感謝したが、都の教育機関であるのでいろいろクリアしないといけない問題があったことは想像できる。その後何回もお願いに行き、数日後 M 相談部長さんに許可をいただき、最初は都研で行われている高校の教員対象の教育相談長期自主研修（以下 自主研）に特別に参加させていただくことになった。M 相談部長さんの温かいご配慮のおかげで、何とか歩き出すことができるようになり、このことがきっかけとなって都研の多くの先生方に約半年間大変なお世話になることになった。自主研だけでなく、直接 M 相談部長さんからレクチャーを受けたり、研修会や事例研究会に参加させていただいたり本当にお世話になった。また、三鷹分室の I 先生（後に大

学へ移られていじめ問題を中心に取り組まれた)、教育相談業務に当たられている心理系専門の何人もの先生方には度々多くの時間を取っていただき、大変貴重なものをいただいた。この温かさは忘れられないものであるが、このご縁をきっかけに M 相談部長さん、I 先生ほか都研の先生方とはその後も長年交流させていただいている。

都研でお世話になることになって、「生徒指導と教育相談」に関する研修の方向性がようやく少し明らかになってきた。その中で、筑波大学分室にはどうしてもお願いしたいことが出てきたので、思い切ってアプローチした。その時私みたいなものに時間を取って対応していただいたのが、真仁田昭教授と原野広太郎教授、そして真仁田研究室(真仁研)の方々であった。真仁田先生からは直接教をいただいたし、その後週に一度は真仁研の事例研究会に参加させていただいた。この出会いのお陰で、私は福井県教育研究所勤務になって、研修講座でお二人の先生方にご講義をいただいたり、アドバイスをいただいたりすることができた。その後私以降の長期研修の方々も、筑波大学を拠点としたものに移行していくことになる。いずれにしても、この出会いを思うと感謝の気持ちで一杯になる。

### (3) 東京工業大学池田研究室

私にはどうしても教を請いたい先生がいた。その当時東京工業大学におられた池田央教授である。以前から私は福井大学の F 先生にお世話になり、数学教育への取り組みについて時々お話をさせていただいたり、共同研究に参加させていただいたりする中で、「テスト理論」に興味をもつようになった。教師になって以来、テスト問題をどれだけ作り、そして生徒の評価をしてきたことか。しかし、通常のテストによって生徒の能力を果たしてどれだけ測れるのであろうか。理想的なテストとはどのようなものか、より良いテスト問題はどのように作ればよいのかなど、テスト問題について深く考えるようになり、私の大きなテーマにもなっていった。池田先生はテスト理論の研究をされておられ、面識はなかったが F 先生もご存じだったので直接大学の研究室へ行って、講義を聴講させていただきをお願いをした。これも大変厚かましいお願いだったと思うが、先生は快く受け入れてくださり、比較的優しい講義の受講やゼミ(私にとってはかなり難解であった)、そして研究室での研究生(院生の中に都内の私立高校の先生が一人研修にきておられた)の方々との交流を許可していただいた。ここでもとてもことばでは言い尽くせないものをたくさんいただいた。池田先生は、2008 年まで日本テスト学会の理事長を務めてこられた。私が福井県教育研究所勤務時代、先生には何回も研修講座でご講義をいただいたり、マイライフ事業(学級・学校・家庭適応度調査関連事業)について常にアドバイスをいただいたりし、事業全般の監修も快くお引き受けいただいた。先生には現在もお世話になっている。

### (4) 長期研修の実践報告書

研修当初から、入手した資料や見聞きしたメモや取材記録、そして関連図書の読書から学んだものなどはできる限り大切に記録しファイルするようにしていた。研修後の報告については、特別にどのような様式にしなければならないという義務づけはなかったが、二度とできない体験は何かにまとめたいと思い、研修終盤になって作成に取りかかった。多くの資料から一つのものを作り上げていく作業は、これまで卒業論文や研究発表などの資料づくりとはまた違って大変骨の折れる作業であった。文章化することの難しさと能力のなさを感じ、落ち込んだりもした。この時代今のようなワープロソフトや印刷機器もなく、培ってきた乏しい知的生産の技術をもとに、KJ 法や取材法、そして一時代前の SORD 社の PC (パーソナルコンピュータ、アルファベットとカタカナの時代)などを補助機器として宿舎に持ち込み、かなりのエネルギーを費やし原稿を手書きしていったが、まさに産みの苦しみを味わった。最終的に、タイトルは「高校教育と学校カウンセリングー私の足もとからの出発ー」としてなんとか原稿書きを終

えた。しかし手書きでは大変読みにくいので、研修終えてから思い切って印刷屋さんにお願ひし原稿を活字になおしてもらって小冊子にまとめることにした。できあがったときの感動は今も鮮明に覚えている。私にとってこの216ページの小冊子は、拙いながらも教師としての一時期を振り返ることができる貴重な一冊となった。

## 2 「高校教育と学校カウンセリングー私の足もとからの出発ー」

私が体験したこの全くプログラムのない一つの研修が、果たして私自身のこれまでの教師としての力量形成という面でどのように影響しているかを具体的にあげることは容易ではない。しかし、この実践報告書を改めて読み、振り返ると、かなり苦しい研修であったことを思うと同時に、教職員の研修において、勿論研修の内容によって異なるが、予めきめ細かにプログラミングされた研修が果たして良いのだろうか、また研修としてはどの程度のプログラミングが良いのだろうかなどを考えさせられた。今から30年ほど前の実践報告書ではあるが、その中から「はじめに」「主題の設定と展開について」「構成（目次項目）」「都立教育研究所教育相談の長期自主研修（一部）」「おわりに」の要旨を次に記す。

### （1）はじめに

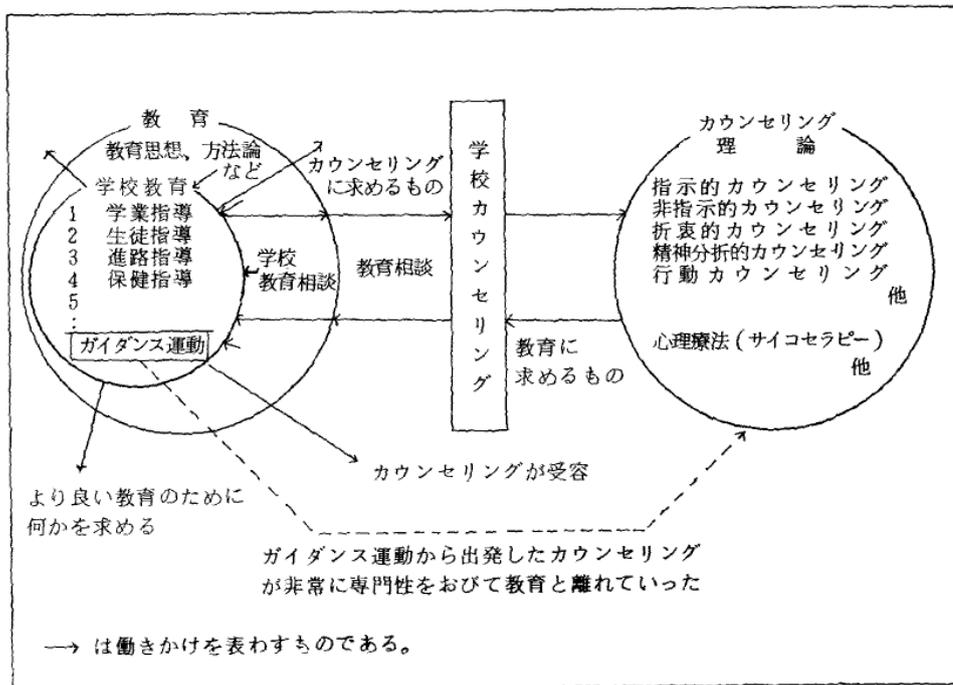
最近の極度に発達した物質文明の中で、生徒たちは何の不自由もなく、何の屈託もない学校生活を送っているように見える。しかし、生徒たちの心の中にも、この文明社会の宿命とも言うべきさまざまな矛盾や悩みがうっ積しているのである。すべての生徒たちはそれなりに問題を持っているといえる。教師として生徒理解の困難さを痛感せずにはいられない。高校進学率が90%をはるかに超えて、今や義務教育化しつつある高等学校教育において、その傾向は更に著しい。旧態依然たる高校教育をもう一度原点にかえて見なおさなくてはいけないという声も至る所で耳にする。一部の生徒たちにおいては、さまざまな条件を背景に生きがい、学習意欲の喪失から怠学、非行そして暴力などの反社会的行動に走ったり、登校拒否や神経症、緘黙、自閉症、家出、自殺といった非社会的行動に陥ったりすることも年々増加する傾向にある。今や社会問題にまでもなりつつあるのである。

このような現状の中で、生徒たちの保護者はいくまでもなく、教師、その他教育に携る人たちは、いかに対処したらよいか心に痛めているのである。教育相談の必要性が改めて叫ばれているのも、このような背景があるからであろう。我が国において教育相談は昭和40年頃から軌道にのり、その後徐々にではあるが、多くの人たちの努力によって全国的に普及し今日に至っている。その間、教育相談の考え方自身も変化しているが、一体教育相談とは何かという問題になるとなかなか難しい。

私はこの度、6ヶ月間の研修期間をいただき、国立教育研究所を中心に、「高校教育と学校カウンセリング」というテーマに取り組む機会に恵まれた。今この研修を終えて、いつも何気なく使っている教育という言葉が、いっそう何か巨大で、重くのしかかってくるように感じられる。この6ヶ月間の歩みの一部をここに私なりにまとめてみて、今後の一つの私自身の糧としたいと思う。しかし、教育相談にしても、私は教育相談というものについて知っただけであって、教育相談が自分のものとなったわけではない。それは今後の私の姿勢にかかわってくることである。今後一歩でも真の教育相談ができるよう努力していきたいと思う。

なお、長期研修に際して御指導いただいた、福井県教育庁指導課長、福井県立高校長、福井県教育庁指導主事の先生方。研究を進めるうえでの御指導、お骨折りをいただいた国立教育研究所指導普及部企画室長、研修生を暖かく励ましていただいた国立教育研究所所長はじめ図書館長、指導室長、その他研究所の諸先生方。迷える小羊をいつも温かく励まし御指導いただいた都立教育研究所相談部長、面倒なお願ひにもにこにこ応じて下さった都研主任研究員の皆様、および相談部の諸先生方。研究を進めるうえでの貴重なアドバイスをいただいた筑波大学教授、埼

学校教育とカウンセリングの関係



表

玉県教育研究所教育相談部長、貴重な御助言をいただいた都研三鷹分室指導主事の諸先生方。高校教育と学校カウンセリングそのものを見せて下さった、都立高校の先生方。それに、都研教育相談自主研参加の都立高校の諸先生方。学校教育相談（高校）研修会のグループの諸先生方。学校訪問の際、貴重な時間をさいて教育相談の取り組みの精神を語って下さった諸先生方。また、学問の厳しさ、高校教師のあるべき姿、高校教育等について、お忙しいにもかかわらず、親切に御指導下さった東京工業大学教授、それに研究生の各先生方にはとても言葉で言い尽くせないものをいただいた。それに、公私ともいろいろお世話になった国立教育研究所研究協力者の諸先生方。この他、本当に多くの方々のお世話になり、温かい励ましの中で研修を進めることができた。ここに心からお礼を申し上げる次第である。

また、この6ヶ月間、K高校の皆様には色々御迷惑をおかけしたこと、ここに深くお詫びの気持ちを申し上げたい。  
(氏名は省略した) 1981年 9月

(2) 主題の設定と展開について

私なりにとらえた次表の考え方によって、主題「高校教育と学校カウンセリングー私の足もとからの出発ー」を設定し、今後の展開をしていきたいと思う。

現在の色々な問題をかかえた高校の教育の中で、より良い教育をめざしたその一つのアプローチとして、この学校カウンセリングというものをとらえていいのではないかと。従って万能では当然ない筈である。これによって諸問題がすべて解決するような簡単なものではもちろんない。すべての生徒たちが生き生きとした目で学校生活をおくるのが理想であるが、多かれ少なかれ今の生徒たちは何らかの不安、悩みを持っている。その不安、悩みの現実の中から、生徒一人ひとりが自分自身をよく見つめ、自分で意志決定をし、自分の意志で進んでいけるように成長して欲しい。小さくてもよいからグライダーではなく、単発機でもよいから自力で飛べる飛行機になっていっ

てほしい。そのために少しでも援助になる教育を、学校カウンセリングを中心に教師自身がもう一度考えなおそうということであると思う。

生徒たちの援助になる教育ということは、大変重要なことである。しかし高校教育においてそこには複雑な様々な問題が立ちだかっている。また知識としてはわかっている、それですが、カウンセリング的な態度をとれるということにはならない。カウンセリングマインドを身につけてともよく言われるが、それも簡単に身につくものではないであろう。

カウンセリングマインドとはこういうものであるということがわかっても、身についたことにはならないのである。そこでどうしても私自身にかかわってくることになってくる、教師としての私自身の問題になってきてしまうわけである。私自身がカウンセリングについて知り、学校カウンセリングというものをどうとらえ、高等学校の一教師として、いかに生きるか、ということになってくる。そうすると、全く私そのものの教師としての姿勢となり、カウンセリングとか、教育相談という言葉は消えてしまうものである。何故なら、カウンセリングの目指すものも教育の目指すものも本質的には同じものであるからである。学校教育の中で、カウンセリングにかかわりを持った教師が、あの先生はカウンセリングの先生だとか、教育相談の先生だとかそういう特別なものとしてあるのではなく、特別視されない教師がそこにあるのがこの主題の目指すところではないだろうか。私自身もそれを目指したいと思う。（ただ、教育相談係とか専任カウンセラーは性質を異にすると思う。）そういう気持ちでテーマも設定したし、私の足元からの出発として考えたのである。このような気持ちで出発した私自身というものの歩みの過程を、ここに展開するに過ぎないのである。

### （3）構成（目次項目）

はじめに

#### 0 主題の設定と展開について

#### 1 カウンセリング

##### 1. カウンセリングとは何か

(1)カウンセリングという言葉の意味 (2)カウンセリングの歴史

(3)カウンセリングと学校カウンセリング (4)カウンセリングの意義

##### 2. カウンセリングの本質

(1)人間性回復 (2)カウンセリングの関係 (3)カウンセリングは援助の関係

(4)カウンセリングは学習と創造の過程

(5)カウンセリングは人間の特質にかかわってくることである

##### 3. カウンセリングの理論

(1)指示的カウンセリング (2)非指示的カウンセリング (3)折衷的カウンセリング

(4)その他のカウンセリング理論

#### 2 学校カウンセリングについての一考察

##### 1. 学校カウンセリングの理論

(1)カウンセリングと教育の関係 (2)学校カウンセリングと教育相談

##### 2. 学校教育相談

(1)学校教育相談とは何か (2)学校教育相談における教師と生徒の関係

(3)学校教育相談の日本における歴史 (4)学校教育相談の考え方

(5)学校教育相談の効用 (6)学校教育相談のすすめ方－高等学校

(7)学校教育での位置づけ

### 3 高校教育と学校カウンセリング

#### 1. 生徒たちへのアプローチ

(1)生徒たちの実態－都立教育研究所における研究

(2)生徒たちの実態－都立教育研究所における調査 (3)生徒たちの実態を知る

#### 2. 学校教育相談での生徒たちとのかかわり

(1)教師としてのかかわり (2)教育相談係（専任カウンセラー）としてのかかわり

(3)ホーム担任としてのかかわり (4)ホームルームでのかかわり (5)授業でのかかわり

(6)課外活動でのかかわり

#### 3. 進路指導、生徒指導

(1)進路指導 (2)生徒指導

#### 4. 問題をもつ生徒

(1)都立教育研究所の相談における最近の傾向 (2)問題をもつ生徒の理解と指導

(3)登校拒否

#### 5. 高等学校と学校カウンセリング活動の状況

(1)A高校（神奈川県 私立） (2)都立B高校 (3)都立C高校 (4)都立D高校

### 4 学校カウンセリングと研修

#### 1. カウンセリングの学習

#### 2. 都立教育研究所 教育相談長期自主研修会

(1)自主研の概要 (2)私の参加した自主研

#### 3. 都立教育研究所 学校教育相談（高校）研修会

#### 4. その他の研修

### 5 研修を終えて

主な研究会、研修会等参加日程、参考文献、参考資料  
おわりに

#### (4) 都立教育研究所 教育相談の長期自主研修会

##### (1) 自主研の概要

##### (イ) 自主研の生い立ち

この研修は都研が昭和47年度に開始したもので、それ以前に実施していた「中堅教育相談員養成研修会」や「学校教育相談セミナー」の研修方法をより発展させたものである。受講者の主体的な問題解決をめざし、実践を積み重ねるプロセスを重視したもので、実習的な研修方法によって、受講者相互の協議を深めるためには、ある程度の少人数で長期間継続することが必要である。自主研のグループは年度によって多少異なるが、小・中・高、区市教委の教育相談員別に構成され、1グループを10人前後のメンバーとし、年間約30回（週1回約3時間）の研修を継続する。特に高等学校グループは、参加希望者も多く、3グループ（本所2グループ、分室1グループ）で行う。

##### (ロ) 自主研のねらうもの

自主研の各グループには、所員が1名ずつ毎回グループのメンバーの一員として参加の うえ、世話人ある

いは推進力としての役割を果たす。研修の進め方は基本的にはグループ カウンセリングの方法を用い、メンバー相互の交流や信頼関係を深めながら、各自の問題 意識を明確にし、問題解決への意欲を高め、生徒や保護者へのかかわり方を見つめなおす場となるように援助している。教育相談活動は、さまざまな問題をかかえている生徒、あるいは保護者との生々しく、真剣な取り組みであり、相手との深い心の絆がなければ真の援助をすることはできない。教育相談の研修においても、一般論や知識だけでは意味がない。具体的な問題状況を明らかにし、個々の生徒の内面への理解を深め、実際にどうかかわれば良いのかを体得することが大切であるといえる。そうした意味で、自主研では、お互いに直面している問題をありのままにさらけ出し、率直な意見交換や人間的な触れ合いの中で援助し合える場となることをめざしている。各グループの具体的な内容や動きは、グループごとに異なり、毎回受講者の自主性を生かして創造していくプロセスともいえる。多くは、事例研究、面接のロールプレイ（演習）、面接の録音テープ聴取、グループカウンセリングの体験学習、生徒指導と教育相談の関連、校内教育相談の組織および運営などについての実践を通しての話し合いで進められる。

受講者の感想としては

- ・心ない言葉で生徒の心を閉じさせていたのではないかとおそろしくもなった。自分の欠 点に目をつぶっていたはいけないことがわかり、一段飛躍できた。
  - ・自分を客観視する機会となった。生徒を理解するどころか、自分の中の垣根を取り払わなければ、いろいろな物差しを持つ生徒たちとの対話は望めないことを強く感じた。
- など、自分を見つめなおし今後の教師生活に生かそうとする様子が如実に示されている。

私もこれに参加して全く同じような気持ちを持った。また、自主研終了後も毎月1回集まって自発的に研修の場をもつグループや、高校グループのように各年度の全修了者によるOB会を組織し、毎年6～7回研修会を開いている例もある。「このOB会などの中で、学校はそれぞれ違っても、お互いがコミュニケーションを持ち続けているのを見て本当に良いことであると思うし、都研の研修会をやる側の1つの望ましい姿でもある」とM相談部長は述べられている。

#### （ハ）高校グループ

自主研を申し込んだ動機として、一部の先生方は次のようなものをあげている。

- ・高校をやめていく生徒が多いことから、教科以前の問題を感じた。生徒の気持ちをどう 把握していくかで自分自身が変われた。
  - ・生徒と話していると怒りたくなる。しゃべりすぎてしまう。生徒の心を素直に聞けるようになりたい。
  - ・生徒と話していて、互いに理解できなくなり、教師の欠点が気になってくる。自分自身 の問題を出して考えていきたい。
  - ・登校拒否の生徒の担任をしていたとき、家庭訪問をしたらしゃべらず逃げられた。その後教師から遠のいて退学してしまった。生徒の発言を封じていたようなので、互いに話しあって、生徒の本心を聞けるようになりたい。
- 動機はそれぞれ少しずつ違うが、どの先生も日頃生徒とのふれあいの中で、生徒との話し合いや、気持ちの理解の難しさを感じている。そのため生徒との面接の仕方、つまり
- カウンセリングを学びたいという気持ちを抱いて参加している。

この研修会は他の研修会と違い、全くプログラムが決まっていない。グループのメンバーが話し合っていくながら決めていくというやり方で行う。はじめはこのような方法に大 変戸惑った。またメンバー同志が知り合うまでは、しばしば沈黙が続くことがある。しかし回を重ねるにつれて、メンバーは少しずつ動けるようになり、学校で抱えている問題が出され、日常の教師生活の中で感じている自分を語るようになる。また、グループメンバーと

しての自分の在り方から、新たな自分に気づいたという発言がみられたりする。このように、グループメンバーとして動く中で、さまざまな経験が重ねられる。

グループの中での体験としては、

- ・1回目の話し合いの後「あんなに長い時間、黙っていたことはなかった。大変疲れたが、黙っていたことで貴重な体験をした。黙っている生徒の気持ちがよくわかった。」
- ・「いつも教師は計画通りに生徒を動かしている。自主的にさせようとする生徒は動けないが、今の自分はそういう生徒と同じ立場に立っているのではないかと動けない自分に気づく。」
- ・「自分自身としては一生懸命で、生徒の気持ちになったつもりでいるが、どこかでずれがいるように思う。それに気づかないことがある。自分を自分で検証できるようになりたいと考えている。」
- ・「生徒の話を書くときは、その日の生徒に対応していかなくてはいけないと思うということを、自分自身がこのグループの中でつくづく感じた。」などである。

このようなメンバーの経験は、自由な話し合い、面接のテープを聞くこと、ロールプレイなど通して体得される。また、グループメンバーの一員として参加している所員自身もまた、このグループ経験から、新たに自分自身の問題が浮きぼりにされ、自分の在り方が反省させられることがあり、苦しみや痛みを感じながらも貴重な経験を積み重ねているということを述べられている。

## (2) 私の参加した自主研

私は、M都研相談部長の御配慮により、この自主研に参加させていただくことになった。一年を通しての研修のところへ半年間研修の私が入ることすら非常に無理なことで、自主研の性格からいっても非常に御迷惑をおかけしたことと思う。また自主研のメンバーの人にも申し訳ない気持ちで一杯である。

私のグループは、Bグループで、所員である都研相談部N主任研究員を含めて14名からなるグループである。毎週木曜日の2時から5時、都研の第6会議室という和室を使って行われる。メンバーはN先生と私を除いて、すべて都立高校の先生方である。そのうちわけは、養護教諭2名、工業2名、普通6名、定時制1名、商業1名である。私が参加したこの自主研の内容を、詳しく述べることは非常に難しい。自分の態度というものも大きなウェイトを占めるし、私の自己訓練でもあるし、この心などの動きを克明に記すことができない。大体のあらましを記す。

### ① 第1回

この日は、本所の自主研希望者全26名に対しての都研からの簡単な主旨説明があり、その後自己紹介、グループ分けを行い、その後グループにわかれた。Bグループでの第1回は、もう一度メンバーの自己紹介をした。これからどういう方針でやるか、2時開始が地理的条件を考えると一寸無理みたいな気がするので全員そろうのは、2時20分にしたらどうだろうか。お茶とかコーヒー、当番はどうするか。テーマは決めるのか、司会者はどうしようか。このようなものを、まだお互いに知らないメンバー同志が、何も決まっていないのだから、こうしようか、いやこうしたらなどと話し合った。教育相談については全くはじめてという先生から、相当の経験をつまれている先生まで色々である。その中で、時には沈黙が続く、何かぎこちなく、私も非常に落ち着きがなくなってくる。一体この研修というものはどういうものなのだろうか。これが教育相談なのだろうか。不安やとまどい、驚きの中で時間が過ぎていく。その中で印象的だったのは、やはりN先生の態度である。何か違うのである。具体的に言えないがとにかく違うのである。都研側の人であるからか、いやそうでなくメンバーの一人として何か違うのである。発言した人の言葉を非常に大切にしているのである。そして様々な気配りがあるのである。このような中で、さしあたって今回はもう時間がないので次回をどうしようかということになる。とにかくメンバーで色々自分のもっている問

題を出すことからはじめようか……そして5時15分に終了した。何かひどく緊張していた自分を思いだす。このような会は私にとっては全くはじめてのことである。我々が時々行う会議とは全く違うのである。大きなことは、この会の中で、自分の言った意見、発言というものがかなり大事にしてもらえるということであろうか。

この短い時間であったが、メンバー一人ひとりとはどんな人だろうか、私はここで何かできるのだろうかなど非常に沢山のことを考えた。ただこのBグループがこの後どうなっていくのだろうかのアウトラインなどは全くつかめなかった。何か私が私について考えたことの方が多かったようである。

## ② 第2回

なんとなくすーと入った。各先生方が自分の問題を実にいろいろ話された。今困っている問題など様々であった。その中に教育相談という考え方がでてくる。N先生は指導者という立場でない。あくまでも1メンバーとして、実に配慮深い。どうしてああいうことに気がつくのだろうと全く感心させられることが多い。私が全く気がつかないことに目がいくのである。昨年自主研に参加された先生も中におられ、今年の感想を話される。「”うまくカウンセリングをする方法”を教えてもらえるものだと思っていたら、最初から全く違うのでびっくりしたが、今考えてみるとやはりこのことが一番自分にとってよかったようだ。」と言われた。最初この研修会に参加しての戸惑いはどの先生方も持っておられたのである。教育相談についての経験が非常に豊富な先生もおられて、この先生の発言もまた何か違うように感じられた。教育相談とは一体何なのだろう、またしても私は考えた。そのメンバーの人たちの中に入ってこの3時間あまり、私は言葉で表現しにくい、非常に充実した気持ちになってきた。私が福井県から来て、特別に参加させていただいているものであるというようなことは、もうこの時はあまり考えなくなっていた。この会が何か非常に私に安らぎを与えてくれるような、次がまた楽しみになるような感じさえしたのである。メンバーについてこの会を通して少しずつ知っていく。そしてその温かさ、熱意みたいなものが伝わってくる。「この先生も私と同じような気持ちでいるのか」などと考える。そして「なるほど。」「自分は聞いていないな。すぐ自分で勝手に解釈して、自分の枠組で話してしまう。」などと今までの私の学校での姿を思い浮かべた。発言する人が一部に偏ってきた時、すぐそれに気づき、他の人の心を、気持ちを思いやる。そのような配慮がいつもただよっているのである。この3時間あまりの状況をここでとても説明することはできない。この会で話し合って毎回テープをとろうということになり、私もとらせてもらった。この時のメモとかテープを聞いてみると、とても良い反省材料になるのである。

ある先生がメモについてきかれたとき「だれがどういったかでなく、だれがどういう気持ちでいるのかななどをメモしようとしているのです」と言われたのには驚いた。

第二回は非常に話が弾んだ。まだまだ意見や話がありそうであったが時間がきて終了した。私は、自分でなかなか発言がうまくできない先生が、この会に出て自分の思っていることや考えていることを素直に表現できて、そしてそれを受け入れてもらったらどんなにいいだろうと思った。このような訓練も私自身の問題としてこの会の中で学びたいと思った。

この日の中で話題になったものの中で、次のようなものがあった。

- ① おとなしくて、黙っている生徒が扱いにくい。
- ② カウンセリング、カウンセラーは甘やかしてはならないのだろうか。

## (5) おわりに

今までの生徒のいる学校での生活から、一転して全く生徒のいない生活。教師にとって、生徒たちの存在がいかに大きいかということをしみじみ感じさせられた。東京という大都会での生活の中で、この半年間本当にいろいろ

なことを考えた。私自身をこのように見つめるという機会を与えて下さった方々に、感謝の気持ちで一杯である。カウンセリングというものを全く知らず、こちらで必死になって何かを得なくては、何とかしようと動いている私は、まさにクライアントそのものの姿であったであろう。それこそ本当に多くのカウンセラーの援助の中で、この6ヶ月間を過ごしてきたような気がする。

全く知らない人たちがばかりの中で、いろいろな人たちと出会い、その人を知る。そしてその中で次第により良い人間関係が育っていく。今この素晴らしさというものを本当に強く感じているのである。実に多くの人たちのお世話になった。その上、国研研修生室の先生方や都研相談部の先生方やその他の先生方にも、私のためにわざわざ送別会までしていただき、その温かさをしみじみ感じたのである。

これらの貴重な体験をさせていただいたことを、今後の教師としての私の中に生かしていくべき努力をしていかなくてはならないと、身のひきしまる思いがしているのである。

最後に、この私のつたない半年間の軌跡を、不治の病に犯され若くして他界した、K 高校昭和 55 年度卒業生 Y 君に慎んで捧げたい。

1981 年 9 月

私が体験した長期研修の概要は、このような僅かな一部分だけ記しただけでは不十分で、とても伝わらないことは明らかである。ただ、長期研修中、事例研究会・研究発表会・研修講座など様々な体験をしたが、その中でも都研で最初に参加することを許可していただいた「教育相談の長期自主研修」は、私がこれまでに全く体験したことがないものであった。この自主研に私は 11 回参加した。ここではそのうちの最初の 1 回と 2 回の感想のみを記したが、3 回以降もこのようなグループごとの自主的な形で進められていった。今 11 回の記録を辿ってみると、まさに私の長期研修そのものがこの自主研で代表されるような研修であったように思えてくるのである。私にとってこの自主研は、教師の研修について別の視点から考えるきっかけを作ってくれた貴重な体験であったし、さらに現在の教職大学院における様々な活動とオーバーラップし、そのカリキュラムを理解する上での大きな財産になっている。

また、「はじめに」「おわりに」において、お世話になった方々や次第に拡大していくことになったいくつかのコミュニティへのお礼などは、とても実践報告書にすべて書ききれぬものではなかった。しかし本当に多くの方々のお陰で研修を終えることができたという感謝の気持ちをここでは伝えなかった。

#### 4 長期研修その後と研修

長期研修の翌年 4 月、9 年間勤務した K 高校から福井県教育研究所相談課の研究主事として勤務することになった。教育研究機関であるので、仕事の内容は大きく変わった。ここでは教員対象の研修講座、所内のさまざまな業務、個人の教育研究、臨床的な教育相談活動、学校との連携業務など多岐にわたるものであったが、このコミュニティでの仕事はあらゆる面において密度の濃いものであった。所員の皆さんは、全所あげて研究熱心で、校種を問わないコミュニケーションも密で、お互いが刺激を受け熱心に取り組まれていた。その当時の相談課の業務は、特殊教育の分野（現在の特別支援の分野）、幼稚園教育をはじめとした幼児教育の分野、そして小学校から高等学校の分野まで広がったが、スタッフは少人数でかなり厳しい状況であった。特殊な分野には専門的なスタッフが配置されていて、同室で業務を進めていくことで未知の分野について多くの勉強をすることができたし、新たなネットワークを構築していくことができた。その意味で、私にとってこのコミュニティは大変刺激的で新鮮なものであった。教員対象の研修講座では、担当者以外の協力体制もあり、校種別の教育相談研修講座、進路指導研修講座、心理検査研修講座など伝統的なものが中心であった。しかし、相談課の研修講座は、臨床的な教育相談や電話相談などを

ベースにしたものである。その内容もこの実践に裏付けされ、説得力のあるものであった。一人一研究体制も確立していて、研究紀要や個人研究をまとめたり発表したりする経験も全所員が経験した。私も個人研究として冊子にまとめた「相談活動を通してみた問題行動の諸要因と指導・援助についての一考察—子どもの心に近づくために—」は思い出深い。

ところが、教育研究所勤務は2年間で、1984年（昭和59年）4月に新設高校へ異動となった。しかし、6年後1990年（平成2年）4月、思いがけず再び教育研究所の同じ課へ異動することになった。ここでの二度目の勤務は、主査として4年、1994年（平成6年）4月から相談課課長として3年、1997年（平成9年）4月から教育相談課課長として2年の、計9年間にもわたり、私にとっては長い教員生活において一つのターニングポイントになるものであった。教育研究所における二度目の9年間の生活は、コミュニティ作りの面でも、ネットワーク作りの面でも、そして教育と研究とのかかわりの面でも、人的財産に恵まれさまざまな新たな体験や実践を行うことができ大変充実したものであった。この期間は質的にも量的にもあまりにも大きなものであったが、苦しくも実りのある長期研修の体験が大きな支えになっていたのではないかと思う。教育研究所においては、自分自身が研修講座を担当し、企画したり講義をしたりと教職員の研修に深くかかわるようになり、教師の力量形成に寄与できる研修とはどのような研修なのだろうかと、スタッフと共に議論を重ね実行してきた。この時々に応じて、長期研修の体験そのものが、多くのサゼッションを与えてくれたことになる。教育研究所勤務の後は、立場上いくつかの学校を短期間で移り変わるという目まぐるしい勤務になったが、どの学校においても教師の力量形成と研修の在り方は私にとって重要課題で、大きなテーマとして模索が続いた。一方私自身も、長い教師生活の中で研修と名のつくものにたくさん参加してきた。その中には、忘れがたい自分にとって貴重な研修も多くある。しかし、私自身の問題として教師の力量形成と研修を考えると、どうしても自らが体験した長期研修に帰ってしまう自分がある。

## おわりに

4月以来、教職大学院において微力ながらも寄与していくには、自分の役割として一体何ができるかを模索する数ヶ月間でもあった。前期、後期それぞれにおいて毎週火曜日16時半から90分間のスタッフ会議とFD研究会、各月月末の院生合同の合同カンファレンス、長期休暇中に行われる集中講座、年2回のラウンドテーブル、時々の拠点校との連携などは、どちらかといえば不連続なかかわりが中心である。このような環境の中での単発的なアプローチは、これまで経験したことのないことで多くの戸惑いがあったことは事実である。そのような中で、今の段階で少しでもお役に立てることがあるとすれば、院生である先生方に拙い経験の片々を省察し、語り、そしてこれからの教育の有り様を一緒に考えさせていただくことぐらいでないかと思っている。教育においても多くのことが、従来と比較にならないほど便利で効率的な時代になっている。しかし教師の仕事は、そのことに押しやられてしまっただけとはいけない面も多い。牛歩のごとく、時間をかけて将来に向けてじっくり歩むことも大切である。教師の力量形成の問題もしかりである。

ここ数年の教育改革の流れは、子どもたち、生徒たちに対して、

- ① 自ら学ぶ意欲
- ② 社会の変化に主体的に対応する能力
- ③ 個性を生かす基礎的な内容の重視

などを教育の重要なものとしている。目指す学力は、学習者の成長・発達や将来の生活に生きて働く資質や能力で

ある。米国の哲学者ジョン・デューイは、「学校を暗記と試験に明け暮れる受動的な学習の場にしてはならない。学校は子どもたちが自発的な社会生活を営む小社会にならなければいけない」と、約100年前に指摘した。これは、これからの学校を、そしてそこで行われる教育の在り方を改めて強く教えてくれる。この言葉は、そのまま教師の力量形成と研修の問題に当てはめることができるのではないだろうか。

教育そして人づくりは、100年の計である。繰り返しになるが、今の目まぐるしい変化の時代、教師自身の力量形成という大きな課題に学校だけの力で取り組むには限界がある。様々なネットワークを最大限に活用し、教育を多面的に捉えた福井大学教職大学院の取り組みは、学校における教師の実践的力量形成のモデルとなるものである。この実践が大きく広く波及していくことは、必ずやそれぞれの学校で専門職としてスケールの大きな教師を育み、学校を活性化させる大きなエネルギーになることを確信する。

## 参考文献

- 1 「教師教育研究 Vol.1、Vol.2、Vol.3」 福井大学教職大学院
- 2 「コミュニティ・オブ・プラクティス」エティエンヌ・ウェンガー、  
リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー  
野村恭彦 監修／野中郁次郎解説／櫻井祐子訳 株式会社 翔泳社
- 3 「「熟議」で日本の教育を変える」 鈴木 寛 小学館
- 4 「学校と社会 デューイ(著) John Dewey(原著), 宮原 誠一(翻訳) 岩波文庫
- 5 「学校教育相談」「統学校教育相談」 小泉 英二 学事出版
- 6 「高等学校 意欲を引き出す生徒指導」 小泉 英二 学事出版
- 7 「教育を支えるもの」 O.F.ボルノウ 森 昭、岡田 渥美 黎明書房
- 8 「学校教育とキャリア教育の創造」 渡辺三枝子/鹿嶋研之助 学文社
- 9 「KJ法－混沌をして語らしめる」 川喜田 二郎 中央公論社
- 10 「発想法」、「統発想法」 川喜田 二郎 中公新書
- 11 「知的生産の技術」 梅棹 忠夫 岩波新書
- 12 「テストの科学－試験にかかわるすべての人に」 池田 央 日本文化科学社
- 13 「教師のための教育相談 Q&A ポケットー子どもたちへ思いをこめてー」  
福井県教育研究所
- 14 「MyLife マイライフーいきいきとした学校生活をめざしてー」 福井県教育研究所
- 15 「なぜ日本人は学ばなくなったのか」 齋藤 孝 講談社現代新書
- 16 「間違いだらけの教育論」 諏訪 哲二 光文社新書
- 17 「高校教育と学校カウンセリング」 巨田 尚彦